

---

# 桜と波

えみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜と波

【Zコード】

N7620C

【作者名】

えみ

【あらすじ】

主人公の佳凜は大人気アイドル赤星海斗と同じ高校に行くことになるが、TVでの雰囲気とは全く違う海斗をTVの中の優しい笑顔の海斗になって欲しいと願い佳凜は努力する。だが海斗の人生は想像以上に苦しい思い出ばかりだった。

私の名前は「立花 佳凜」東京都内の公立高校に通うじく普通の女子高生。

今日は私が入学する事になつた東京南第一高等学校の入学式。

知り合いもいないので、その日は一人で高校に向かつた。

行きの電車には同じ制服の人たちが沢山のつていた。

みんな「友達と来ていて一人の私は  
「中学校にもどりたいなあ」とふと思つた。

学校に着いてからも一人。

私は

「このままじゃいけない」と思い教室に一人でいた小さくて可愛ら  
しいタイプの女の子に勇気を出して話しかけた。

これが後に後悔することになつた

「私は立花 佳凜つていうのー中川中学校から来たんだあ。仲良く  
してね」

「ああ。うんー。よひしへ。春日部 波だよー。波ツツて呼んでねー。」

「じゃあ佳凜つて呼んでー！」

先生が入つて來た。服装もきちんとしていて清潔な感じがした。

なんとか無事に高校生活の初日が終わり、帰りは波と2人で帰る事になつた。

帰りの電車で私の憧れの大人気アイドルの【赤堀 海斗君】が乗つていた。

海斗君は、ばれないようにサングラスに帽子をかぶり変装していたが大ファンの私にはすぐに見破ることができた。

思わず、隣に座つていた波に

「海斗君がいるよー。あのすつごーにカツコイイ海斗くんだよー。ほらあそこにいるでしょー！」

ふと我に返つた私は周りの目線が海斗くんに注目している事に気が

いた。

隣にいたはずの波がない！

波は海斗君の事をかばうように次の駅で降りていった。

「波、確かに大塚駅で降りるって言つてたよね。ここ、まだ中野じやん。」こう思った時に海斗君と波の間に何か関係があるんじゃないかと思い始めた。

一人、大塚駅で降りた私はトボトボと歩きはじめた。10分程たつただろうか？やっと家に着いた。そのたつた10分が長く感じた。

お父さんは仕事。5才離れの弟、翔也は地元のサッカー倶楽部の練習で、お母さんは近所のおばさんたちとお茶でも行つてゐるんだろう。

家には誰もいない。

「ただいま」

誰もいない我が家に言つた。今日ほとんどの時間を一人で過ごしたせいか誰かに暖かく迎えて欲しかったのだ。

もちろん、返事は返つてこない。シーンとした家に

「はあ～」

とため息をつき、足早に2階にある自分の部屋へと向かった。

「バタンツッ」

乱暴に部屋のドアを閉めすぐベットに横たわった。

そして、自をつぶり今日起こった出来事を振り返った。  
まず、海斗君の事が頭に浮かんだ。

「あれから、あの2人どうなったんだろう? 海斗君怒ってるだろ?  
な?。明日、早めに学校に行って謝らなきゃー。」

そう思つた私は海斗くんの組を知りたくなつた。

〔今日もらつた新入生名簿に載つてゐるはずだー。〕

急いでかばんから取り出した。

〔えーと。あつた! 3組かあツツて私と一緒にやん。〕

何で教室にいたはずなのにきずかなかつたんだろう?

不信に思つた。

「スターはやつぱり校長室とかで待つてたんだろうなー。騒ぎになる  
と大変だし」

単純な私はそう確信してそのまま眠た。

3時間ほどたつた頃に翔也が起こしに来た。

(「ねーちやんー!」)飯出来たつてえ。早く来ないと俺が全部食べるよ)

「今から行くよ」

そつまつて一階にあるコンビングに入つて行つた。

もう、みんな帰つて来ていた。

「みんな帰つて来てたんだ。」

お母さんが心配そつて『学校どうだった?』と聞いてきた。

入学式にも来ないで遊んでたのに良くそんな事言えるよねー。  
ツツて言いたかった。

でも、格好悪いから「友達つべつて簡単だね。クラスのみんなと  
仲良くなつたよー。」

つまらない嘘をついた。お母さんに初めて嘘をついた。

今までにない罪悪感が胸を押し潰した。

「」飯を食べる時も楽しそつなそぶりをして食べた。

本当はず「」不安だつた。

自分にも他人にも嘘をつくのが嫌で、中学校の時、一番仲良しだつたみつちゃんに電話した。

でも、留守電だつた。

一人取り残された気がして、その夜はずっと朝になるまで泣き続けっていた。

朝になつて学校に行きたくないと思つたけど、  
「ちやんと海斗君に謝るつて昨日きめたじやん！」

行かなきゃッッ！

きずくと、走りだしていた。

7時19分発の山手線に乗りながら、  
「私には波がいる。昨日はあんなひどい別れ方しちやつたけど、謝りさえすればきっと仲良くなつていけるよ。」

7時半すぎに学校に着いたけど、まだ誰も来てなかつた。とおもつた。

でも、中庭の池にポツンと座つてゐる人がいた。

「海斗くんだ！何で話かけたらいいんだろ？あんまりなれなれしこのまNGだよなーよし決めたー行こうーーー！」

私は池にまつじべりに向かつた。

〔昨日は本当にめんね。大声で海斗くんだったて言つちもつて。反省してるーーー〕

別にこことよ。でもこれから俺の近くでくるな。

〔どうして？話じべりこましてもここじやないーーー〕

〔やわらかなんだよーーー〕

〔海斗くん、TVでは優しく笑つてゐるのー。〕

関係ねえだろ

〔じゃあ私が海斗くんをTVでのあの優しい海斗くんに変えむーーー。〕

ああ！変えるんなら変えてくれよー！こんな可哀相な俺を昔の俺にみたいな優しい人間に変えてくれよー！

「変えるよーー！」んな海斗くん嫌だもん！」

そんな言い合いで終わって、教室に入った。波が教室の前で立っていた。

「波、おはよー！」

「おはよー！」

「昨日は、ヤメンね。海斗くんにも波にも迷惑かけちゃったね」

全然悪こじてないよー。

それから私は海斗くんを変えるために一生懸命つべした。

そんな毎日が続いて2ヶ月。やつとクラスの子たちとも仲良くなつてきた。

そして、春が過ぎて夏になつた。

暑い毎日の中、海斗君が来る日は1ヶ月に一回ほどでたまに来ても、午後からきたり、早退したりで今だにクラスと馴染めていなかつた。

それが気掛かりで、最近仲良くなつた幸子と海斗くんが楽しめるクラスにしようと、1年3組に呼びかけた。

予想通り、海斗くんは嫌がつた。

波はそれを見て海斗くんと一緒に教室から出でていつた。

でも私は後悔していない。

海斗くんがTVの中の海斗くんになつてくれるために、いろいろな手段を使う事にしたから。

隣のクラスの三浦大樹は海斗くんの幼稚園からの幼なじみで、海斗君の事を良くしっているんじやないかと思つた。

「ねえ。三浦！海斗くんって昔はどんな感じだったの？」

佳凜「海斗が好きなのか？」

「まあファンとしてね。」

「おうそつかーならよかつた！」

「で、どうなの？」

まああいつにも色々大変なことがあったんだよ。

「それを教えてツツー言ってんじやん」

「じゃあ俺と付き合おうよー」

海斗くんを変えるには過去を知るしがなかつた。

「いいよ。でもちゃんと教えてもらひよ？」

「OK！」

大樹と付き合い初めて1ヶ月、初めて海斗くんの過去をしつた。

大樹が話してくれた。

海斗くんが小学生の時、桜ちゃんと並んで女の子がいて桜は体がすごく弱くて酸素マスクを外したら死んでしまうぐらいに弱っていたそで、当時小2だった海斗くんは桜ちゃんの口ぐせだった。本物の桜を見たい。桜を見たらいいつ死んでもいい。つという夢を叶えたくて桜の季節に桜ちゃんをおんぶして桜を見せてあげたんだそうだ。それから19時間後、桜ちゃんは還らぬ人となつた。死ぬ前に、桜ちゃんが書いた手紙をいつまでも持つていてるそつだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7620c/>

---

桜と波

2011年1月23日02時46分発行